

『大学』の書の解題

一、大学の書と我が国の文化

梈 野 忠 次

源氏物語の乙女の巻に

大学の道にくはし
と見え、その湖月抄に

夕霧を大学寮にいらて学問させ給はといふ心也

と注している。これなどは、唐の大学の制度の影響によるものであるが、その大学の制度の本づくところは、この大学の書にある。

永祿から慶長ごろまでの人で細川幽斎の門に学んだ中院通勝なかにん とうしょうの嶮江入あきえ楚そに源氏物語の大意を説いて

意を誠にして心を正し、身を修、家を齊、国を治、天下を平にする事、道を明す也。此物語一部の大意も、是を本とせり。

といつてゐるのは、むしろ、大学の書の大意を説いたようなもので、国文学の解釈に、大学の書の考えかたを取り入れている。

江戸時代になると、朱子学が盛んに行われたので、漢学を学ぶ人は、多く先づ朱子が此の大学に注した大学章句から読んだ。

江戸時代に、初めて漢学を学ぶ子どもなどは、素説といつて、意味は後まわしにし、たゞ朗説することを学んだものである。幾度もくくりかえして、暗誦するほどに学んだものである。これ

から、論語や孟子などの素説に進み、それより解釈に入ったものである。この素説の法は、近ごろまで、彼の国でも同じであったことは、胡適氏の四十自述に見えてゐる。

もとより、子どもが初め学ぶのは、大学章句の大きな字の部分のみで、やがて四書そのほか次第に進んでから、解釈に入ると、注によつて解釈するのである。この素説と、注によつて解釈することとは、彼の国の文を学ぶ方法として、古人のとつた道である。

大学章句を説むこと、すなわち注によつて大学の解釈を考へるといふことは、大学の書にいつてゐる

正心、修身、齊家、治國、平天下

のことを学び、儒教哲学の倫理學政治學の要を知るとともに、宋代哲学の大要にふれることになるので、これによつて、古人は、その哲学、政治學、倫理學の大体を身につけ得たのである。荻生徂徠のことは、その訳文筆蹄の題旨に見え、二官尊徳のことは、報徳記に見え、古人研鑽のあとを伝えてゐる。

江戸時代は、儒學の考えかたが一世を動かした時代で、諸侯や、その

ほかの、政治家で、善い政治をした人は、おおかた、大学の書の精神によつたものである。たゞ、惜しいのは、眞に大学の書の精神を行にあらわした政治家は、決して多いとは、いえないことである。したがつて、折角の江戸時代も、理想と現実とが、大にかけはなれてしまつたのである。しかし、その理想とした儒教の精神は、ともかくとして、之を行つた人は、江戸時代を通じて、歴史に残るほどにはあつたものであり、その善政が、一時代に、一國に、行われたことのあるのも、歴史に残つてゐることで、今の人の深く思いをいたすべきことである。

凡そ、思想は、一代を動かす、一國を動かす、天下後世を動かすものである。人は之によつて心の抱る所を得、之によつて家を齊え、國を動かす、天下を動かすようになる。天下が太平になるのも、乱れるのも、一身一家が立つのも、みな、之に由るのであつて、思想の影響は、大である。

儒学という大きな思想、宋学という大きな思想、これは、古人が取つて心の糧としたものであり、又、今の世の人の心の糧として大きな意義のあるものである。

二、大学の書の内容

大学の書は、もと礼記の中にあつたもので、之を取り出して重んじたのは、宋代になつてからである。

その中の思想や文章を考えると、論語や孟子よりも後のものである。

これは、孟子には、

正心

のことがあるが、

誠意

のことがなく、まして

格物

のことがないというような例を取つて見て、知ることができる。

中に曾子の語が載つてゐるから、曾子の学派の人の著わしたものであることは考えられるが、それとても曾子の門人などではなく、ずつと後学の人によつて出来たものとこそ、考えられない。

学問や思想は、ある学派の中で、時がたつにつれ、次第に發展するものである。

儒学も、孔子のときよりは曾子のときが發展し、曾子のときよりは孟子のときが發展し、更に時代がたつにつれて、一層、發展したものである。

この發展ということは、すべての学問や思想にとつて大切なことである。

大学の書は、程子の考えたように孔子の遺書ではない。朱子の考えたように曾子の伝えたまゝのものでもなく、曾子の門人の記したものでもない。ずつと後のものである。

かえつて、これでこそ、大学の書が、論語や孟子や中庸などと、相對して、その存在の意義を有つ所以である。

格物致知などの解釈について、後世いろいろの説の出たのは、一つには、大学を孔子や曾子の当時のものとして、古いものゝように考え過

きた為である。

三、朱子の大学章句

朱子は、その一生を通じて、四書の注釈に最も力を注ぎ、その注釈を世に出してからも、改訂を怠らなかつた。ことに大学章句は、最も意を用いたもので、大学の誠意の章を改めたのが、その絶筆となつたと伝えられている。

朱子は、宋代哲学の見かたから古書に注釈を加えているから、その注釈には、古代の思想に合わぬものや、古代の文字の用いかたに合わぬものができ、後の學者から正されるところも多い。

しかし、朱子は読書の博く且つ深かつた人で、かなり精しく古代の文字の用いかたなども、しらべているから、おしなべて考えると、その注釈は、おだやかであつて、朱子みずからの学説による考え過ぎや誤りを除けば、今なお、古書を読む好き手引である。かつ、之によつて、宋学を代表する朱子学の要を知ることができるのである。

明の王陽明のように、大学の書には錯簡も脱文もないという學者もあるが、まづ、多くの學者が昔から疑つたとおり、礼記の中の大学篇には、錯簡も脱文もあるようである。

朱子の大学章句は、古い礼記の大学篇に比べると、よく整つてゐるが、果して、これが昔の大学のできたころのものに合うかどうかは疑わしい。

しかし、朱子みずからの学説を以て立ててあるから、朱子の学問を知

るには、この上もなく好い本となつてゐる。

読者は、之によつて、古しえの大学の書の思想を窺うとともに、宋学の大意に接することができる。これは、最も意義のふかいことである。

こまかい処こそ、大学の作者の古い心もちが分らないが、その誠意、正心、齊家、治國、平天下の道は、朱子の章句でよく分ることであり、朱子の哲学によつて、理を窮め、意を誠にし、心を正しうして、家を齊へ、天下を安んずる人生の意義を生き／＼と感ずることは、大きな幸いである。

朱子が「大学」の注釈を作つて「大学章句」となづけたのは、もと「章句」といふことばに注釈の意味があつて、後漢の趙岐が孟子の注釈を作つて「孟子章句」と題した例などがあるからであり、なほ、もと、大学の書は、礼記の中にあつて、一つのまとまつた文であつたのを、朱子が其の文を幾つもの章に分けたからである。

四、大学の三綱領

大学の書の大意は、

明德を明らかにす——明明徳

民を親たにす——親民

至善に止る——止於至善

の三つで、朱子が「此の三者は、大学の綱領なり」と注してから、世に之を三綱領というようになつてゐる。

しかし、この書をおしわたして読んだところでは、ほとんど、この三つのことを初めに挙げたばかりで、あとに詳しい説明がなく、したがって、あまり重きをおくほどになっていない。

『明德』とは、获生祖探の大学解や大田錦城の九經談によると、上たる人の善き行で、その地位がたかく、人々の目につくところから明と云ったもので、之を行って人に示すのが『明明徳』である。これは、『詩』書』『左伝』などの古い書物について見れば、よくわかることである。朱子が大学章句に、人が天より受けたもので、おおくの道理をそなえて万事に應ずるものといふような注釈を加えたのは、作者の意味を誤っている。

『親民』は、民を親たにすといふ説と、民を親むといふ説があるが、大田錦城の大学原解は、朱子の大学章句に、民を親たにすといふ説を取って、民の旧き生活を変化して善に遷らせることであるといひ、その証として、『書』の堯典の『黎民こゝに遷り、こゝに雍ぐ』——『黎民於變時雍』とあり、『礼記』の学記に『民を化し俗を成す』——『化民成俗』とあり、『礼記』の経解や『孟子』に『民日に善に遷る』——『民日遷善』とあるのを挙げてゐる。古書には、親と新と通い用いた例があり、親を新の字の意に見ることは、『韓非子』の亡微篇に

親アノラシキニシテ 臣アノトシテ 進アノトシテ 而アノトシテ 故人退アノトシテ

などの例がある。しかし、この『大学』の書をおしわたして見ると、この思想は、ほのかに、あらわれているに過ぎず、親を字の始く、『したしむ』として、全体の文に、さほどに深く影響あるほどでもない。

『止於至善』は、ほゞ朱子の注の如くであるが、宋代哲学の上から、深く考えすぎている。これは、大学の書の中に、説明があつて、父としては慈、子としては孝に止まるといふようなことである。朱子の如く、深く考えることは、学問や思想の発展の上からは、もつともなことである。止まるといふのは、とまってしまうことではなく、調和して安定することである。

五、大学の八条目

格物、致知、誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下、これを大学の八条目というのは、やはり、朱子の注に本づくのである。

大学の書は、明明徳、親民について、ほのかなる説明を加え、止於至善については、かなり、はっきりした説明をなし、誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下については、かなり詳しい説明をしていて、ほとんど、大学の主意は、この誠意、正心、修身、齊家、治國、平天下にあるが如くである。

格物致知の説明は、もつとも、明かでなく、この為、昔から、いろいろの説が出てゐる。朱子の大学章句の説は、深く哲学の上から考えたものであるが、之によると、ほゞ、平明に解釈することができるようである。しかも、この格物致知の解釈は、朱子哲学の上において、大きな地位を占めるものである。こういう考えで、朱子が天下の物事を見て、之に接し、之をとりさばいていったのである。惜しいことに、この考えかたが、宋代の思想界において、自然科学にまで及ばな

かつたことである。たゞ、ほど道徳の上に、かゝわつていて、自然科学の発展に及ばなかつたことは、東洋文化の爲に、惜しいことであつた。

大学章句補考

〔止者所当止之地……〕 止を「止まるべき地」と見る考えかたは、『詩』に見えてゐる。

鼠をみるに齒あり。人にして止なからんや。人にして止なくんば、死せずして何をかまたん。——相鼠

毛伝に注して

止は、止り息ふ所なり。

といつてゐる。

しかし、大学の書のものとの意は、

止於至善

の止を承けていつたものである。

止るを知るとは、人の当に止る所あるべきを知るなり。

——清、宋翔鳳、大学古義説

〔古之欲明明徳於天下者、先治其国……〕

古の世を正し天下を調へんと欲する者は、必ず先づ国の政を觀る。事務を料り、民俗を察し、治乱の生ずる所を本づけ、得失の在る所を知り、然る後に事に従ふ。——管子、正世

よく天下を有つものは、必ず其の國を失はず、よく其の國を有つものは、必ず其の家をうしなはず、よく其の家を治むる者は、必

ずその身を遺れず。よく其の身を修むるものは、必ず其の心を忘れず。よくその心を原ぬる者は、必ずその性をかゝず。よく其の性を全うする者は、必ず道に惑はず。——淮南子、詮言訓

〔湯之盤銘曰、苟新、日日新、又日新〕

湯は、殷の湯王であることに、古来、異説はない。こういう古い時代の銘を引いたのは、本當に有つたのかどうか疑うべきことで、何か古い銘の文字を、大学の作者が、この書の文意を助ける爲に、わざと、かくの如く読んだものかと思われる。大学の作者は、『書』の文句も『詩』の文句も、この書の文意を助けるためには、原文の意を変更しているからである。

〔緝熙敬止〕爾雅によれば、緝も光明の意がある。

詩のものとの意味は

文王の徳が明かで、よく敬すること、

こと、

於緝熙にして敬す

と読むのであるが、大学では、『止る』の字に意味を有たせたのである。かくの如き詩の引用法を斬章取義といふ。

〔如切如磋、如琢如磨〕

切するが如く磋するが如く、琢するが如く、磨するが如し。

と訓むのは、古い明經家のよみかたで、建武年間に清原頼元の伝えた古鈔本論語にも記してある。齶は、磨の漢音で、漢籍を漢音すなわち唐のころの長安の音で読むという名ごりである。

〔詩〕の毛伝によると、

骨をみがくのが切、象牙をみがくのが磋、玉をみがくのが琢、石

をみがくのが磨である。

朱子は、切を字の如く切る意に見て、この二句に、精しい考へかたをしてゐるが、古い書物に証拠がない。

切を磨く意に用いているのは、史記の刺客伝に「切齒」の語が見えてゐる。

清の郝懿行の爾雅義疏によると、この「切は」は、「すりみがく」といふ用ひかたであることを証している。

もとく、漢語においては、「みがく」といっても、すべて何でもみがくのではなく、骨には切、玉には磋というようないかたがあったらしい。故に毛伝や爾雅の如く説いたものであるらしい。

竹田復博士によると、同じ狩でも、古くは春は田、夏は苗、秋は彌冬は狩

という区別があり、狩の字は冬のかりで、ひろくいふことばではなかつた。老といつても

七十が老——説文

八十が叢——礼記、曲礼

という区別があり、死でも、身分によつて

天子が崩、諸侯が薨、大夫が卒、士が不禄、庶人が死——礼記、

曲礼

といふ区別があつた。

漢学会雑誌、第十卷第一号、「譬喩について」

この切磋琢磨も、骨や象牙や玉や石などいろくものものをみがくに用いることばを練りかえて歌つたものと思われる。

この詩のものと意味は、

立派な衣服をつけ、その態度の見るべきものある上の人を美めて、骨や象牙や玉や石などをみがいたようだ

といふのであつたのを、大学の作者が引いて、このように学問自修のことにしたのであつて、断章取義である。

衛風切齒の詩、古註以来、学問研究のことに説きなせり。大学もそのとほりなり。われおもふに、詩の本旨もとよりかくの如くならば、そのかみ婦人小子どもみなかくその義をさとるべし。……

此はもと衛武公の徳容威儀をさまりいさぎよきをほめて、かく作りたるものにて、学問研究のことにほすしもあづからず。……その証拠には、第二章に「充耳琇瑩、会弁如星」とあり、第三章には「如金如錫、如玉如璫」とあり。いづれも、威儀服章のことをほめて、さしてふかきわけもみえず。

伊藤東涯、説詩要領、

この詩について、古から衛の武公についての詩と説いているが、別に確かな証拠はない。